

大学院が学校に寄与する授業内活動の評価 —英語科におけるICT活用法の提供を主軸として—

目的

大学院の授業の中で、受講生が主体となり、英語科授業におけるICTの活用法を考案し、本学附属校へ教材等を提供することを通して、**大学院・学校間の連携をめざした大学院授業を開発**すること

方法

- ① 大学院授業「**教材題材開発研究（言語と文化）B【英語教育とICT】**」を対象とした。
- ② 英語教育関連の**理論**を参照しながら、学校で活用できる**ICT教材の開発**を行った。
- ③ 受講生は、「**ICT教材説明書**」「**ICT教材説明動画**」「**理論編レポート**」を作成した。
- ④ 受講生と本学附属校教員に対して、本授業の評価や大学院と学校の連携に関する意見を尋ねるための**アンケート**を実施した。
- ⑤ アンケート結果をもとに考察を行い、**英語科におけるICT活用法の提供を主軸とした大学院と学校の連携授業の原型**を作成した。

結果 1

【受講生へのアンケート結果（一部）】

- ・ **理論面**から活動を考えると授業の特徴がある。
- ・ 毎回の**受講生同士の交流**により、さらに視野が広がった。
- ・ 学校現場へ教材を提供するという目標によって、**より生きた題材**を考えることができた。
- ・ 簡単な**模擬授業**を最後に行うとさらに場面をイメージしやすくなる。
- ・ 学校の**ニーズ**を事前に確認できるとよい。

結果 2

【附属校教員へのアンケート結果（一部）】

- ・ 教材や実践結果を共有することで、**より効果的な授業を生徒に提供**できる。
- ・ 教材作成の時間を短縮でき、**効率的に授業準備**をすることができる。
- ・ **教材開発の参考**になる。
- ・ 双方向的な協力関係を築くために、教員から**ニーズ**を確認するとよい。
- ・ **英語使用場面や文法項目ごとの教材**がほしい。
- ・ **データベース化**すると教材を活用しやすい。

活動評価

附属校へ教材等を提供することを授業の目標にしたことに関して**肯定的な意見**が見られた。また、授業内で議論しながら**理論に裏付けされたICT教材**を作成し、附属校へ教材等を提供することができた。一方、**事前に学校のニーズを分析**することで、作成する教材にさらに**意味付け**することができ、**より強固な協力関係の構築**につながる可能性が示唆された。これを元に、下図のような**授業の原型**を作成した。

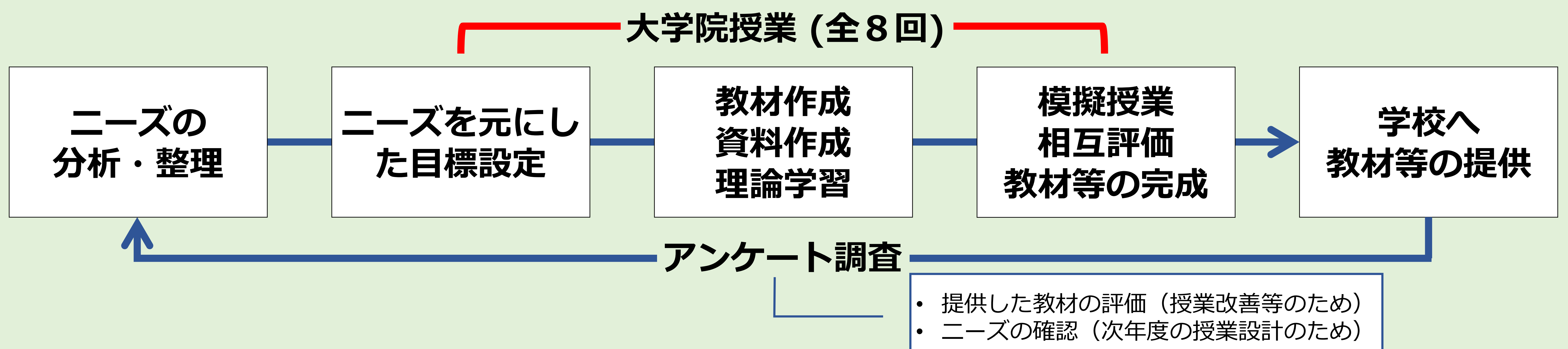


図 大学院と学校の連携授業の原型

※詳細を大阪教育大学紀要に投稿予定